

百人一首詠込都々逸(追補)

菊池真一

前稿《百人一首詠込都々逸研究「甲南国文」第五十七号。平成二十二年三月》に続き、百人一首を踏まえた都々逸を紹介する。

一 『百人一首小倉山松の志津久』

山本将茂『百人一首小倉山松の志津久』(明治四十一年)
山本将茂は柳塘と号す。生没年不明。

本書は一頁に一首ずつ百人一首を掲げ、その後、その後に歌の説明とその歌を踏まえた都々逸を掲げたものである。ここでは都々逸のみを抜き出す。

袖も袂も露にはぬれて夜明けがたから蒔る稻穂」(一)
夏の着物を今日出し初めて山ほど衣桁にかけて見る」

(二)
たつた独りで寝るかと思や主の来ぬ夜の待ち遠うさ」

(三)
田子をかた手にもつたる姿雪の肌に富士額」(四)

もみじふみわけつま呼ぶ鹿の声聞けや哀れの身にぞ沁む」(五)

霜の真白にふりたる朝に主を帰した事もある」(六)

主のそばなる三笠の月をわたしや他国の空で見る」(七)

わしが住ひは都の異うきな心じやと人は云ふ」(八)

主のこゝろもあの長雨にうつりかわりし花の色」(九)

行も帰るも逢坂なればたまにやみかわすこともある」

(十)

浪にゆられて他国へ行くと人に伝へよ海士小舟」(十一)

棹姫の春の姿を留めてをいてしばしながめん舞の袖」(十二)

(十三)

深き恋路のあの淵さへももとは葉末のしと雫」(十三)

わたしの心わ文字摺り衣よみだれそめたも主の為め」(十四)

(十四)

君が為とて若菜を摘めば重いほどつむ笠の雪」(十五)

をしき別れもしばしの間待つときくならかへり来む」(十六)

(十六)

神代の人にもみせたいものは錦流るゝ龍田川」(二七)
忍ぶおかたへかよわす夢もほんに人めをしのび勝ち」(一八)
臥すま短き夏の夜なれば逢わずに待てとは罪な人」(一九)
何はともあれ身をつくしても逢わにやかへらぬ此からだ」(二〇)
来るかくるかと此長き夜を待ちあかしたる身のつらさ」(二一)
嵐といふ字を分析すれば思ひ立田の山の風」(二二)
我身ばかりの秋でもないに月見りやこゝろもくもりがち」(二三)
にしき織りだすもみじの枝を神に手向てかへりたい」(二四)
人の知らないそのまにちよつとからんでみせたい蔦かずら」(二五)
峰の紅葉に心があればまたもをいでに待つわいな」(二六)
ふかき思いのわきでる川のいつみて恋路のましたやら」(二七)
人目も草も皆枯れ果てゝほんに淋しき冬景色」(二八)
霜か雪かと心が迷ふほんに奇麗な菊の花」(二九)
つれなく別れし昔を思や幾くもうるさいあけの鐘」(三〇)
夜あけの月かとおきいでみれば首尾もよしのゝ今朝の

雪」(三一)
流れをとめたるあの柵は姫がかけたる唐錦」(三二)
ほんに長閑な此春の日になぜにちるかよ山桜」(三三)
松が人なら我友にして昔話をしてみたい」(三四)
主は来ねども年ふるさとは昔ながらに花も咲く」(三五)
みじかいこの夜に出る月影は雲のいずこにやどるやら」(三六)
野べの千草に秋風立ちてこぼれがちなる露の玉」(三七)
振らるゝ此身は露いとわねどあんじますぞへ主の身を」(三八)
なぜにかくまで恋しきものぞ忍べど穂に出る篠すゝき」(三九)
人の問まで色さへうせて包みかねたる袖の露」(四〇)
人の知らぬと思ふが無理よかべに耳ある世のたとい」(四一)
末の松山こす浪あらばかたみに袖をばしぼりたい」(四二)
こんな苦勞をするのに就て逢わぬ昔を思ひだす」(四三)
逢ひたいみたいと云ふ気がなけりやわたしやあなたを恨みやせぬ」(四四)
露と消行果なき身をば哀とみてとる人もない」(四五)
わたしのをもひは棹さし小舟さして行く手も分りやせぬ」(四六)
八重に葎の茂れる宿は人の知らぬに秋が来る」(四七)
わたしの心は岩打つ浪の思ひくだけでちるばかり」(四八)

八) 衛士のたく火の夜はもへひるはきえも入りたき我心「(四九)
捨てゝあいたい此命でもあへばどうやらをしくなる」(五〇)
こんなになるのも主や不知火のもゆる思ひをあかした
い」(五一)
明けて暮るゝは世の常なれど朝の別れがなけりやよい」
(五二)
察しておくれよ此長き夜に独り寝るのゝ淋しさを」(五三)
末を思へば果ないものよほんに死にたい今の内」(五四)
絶て久くたよりも無いが立ちし浮名は消へもせぬ」(五五)
とても此世にあわれぬからはせてしとこととはなした
い」(五六)
晴れてうれしはしばしの事よ雲にかくれの夜半の月」(五七)
秋が来たのか篠ふく風のそよとたよりもなくばかり」(五八)
月の入るまで休みもせずに来るかか待つものを」
(五九)
遠くへだてしふたりのなかはほんに文見る事もない」(六〇)
雲井の御庭にいま咲く花ももとの都の八重桜」(六一)

鶏の鳴いたとだましやんしても胸の時計は許しやせぬ」
(六二)
こうなるからは切るてふ事をお目に懸りて話したい」(六三)
くもる胸さへかつかつ晴れて見るもうれしき今朝の霧」
(六四)
思ひの露さへ溢れていまは目に立つ袂が恨めしい」(六五)
哀れわたしの山家の住居花の外には友もない」(六六)
しばしなりともその手枕を借れば浮名が立わいな」(六七)
浮世はなれて今宵の月を見ればどんなに嬉しかろ」(六八)
誘ふ嵐に気をもみじ葉のをもひそめたる唐錦」(六九)
辛気くささに宿立でればいずこも同じ秋の色」(七〇)
芦の円家に吹く秋風の音もほんに淋しき秋の暮」(七一)
浮たお方のその仇波にぬらしともなや我が袖を」(七十二)
高峰の桜も今花ざかりいやな霞のなけりやよい」(七三)
はげしかれとはいのりもせぬにまたも初瀬の山おろし」
(七四)
露を命と契りし秋も立て袂は初時雨」(七五)
そらが水かとさだめもつかぬ海の景色のをもしろさ」(七六)
岩にせかれて分るゝ水も末は海にて逢ふわいな」(七七)
主に淡路のあの島千鳥ないて心もすまの浦」(七八)

むねの白雲いつしか消へて晴れてうれしき月の影（七九）
 結ぶ契りのいと長がかれとけさは心もみだれ髪（八〇）
 時鳥かと窓の戸あけりや峯に残れるあけの月（八一）
 思ひ様ではどうでもなるになぜに涙がたへぬやら（八二）
 秋は来ねどもこの奥山道に鹿が恋するつまを呼ぶ（八三）
 うしと見し世も恋ひしからわ忍んでこのまゝくらしたい（八四）
 物を思ふて寝られぬ折はほんに夜明の待ち長がさ（八五）
 月の雫か今日此頃は眺むるたびごと出る涙（八六）
 露もまだ干ぬあの槇の葉を隠す狭霧の立にやよい（八七）
 芦の一とよの其契りゆへ短い間も忘れかね（八八）
 一層こがれて死ぬともまゝよ今じや互のこんくらべ（八九）
 お目にかけてよか涙にぬれて色の変たこの袖を（九〇）
 虫の声さへ寒けき夜半にたつた独りでまる寝する（九一）
 乾くまもないわたしの袖は人のしらない沖の石（九二）
 海士がつな引くあの面白さいつまで立つても眺めない（九三）
 旅の夫を案ずる夜半に聞くも身に沁む小夜きぬた（九四）

四）
 円頂黒衣の身の分際で恐れ多いよ此祈祷（九五）
 誘ふ嵐に散る花見れば年老るからだか思はるゝ（九六）
 待てど来ぬ夜は炬燵の炭よもゆる思ひに身をこがす（九七）
 七）
 夏越の祭りをする声聞けばほんに哀れも忘らるゝ（九八）
 儘にならぬが世の常なれどそむく心がうらめしい（九九）
 軒は傾き草さへ茂り見るもあわれな主の家（一〇〇）
 明治四十一年九月廿五日印刷
 明治四十一年十月十五日発行 定価金貳拾銭
 編輯兼発行者 大阪市東区越中町一千六百十三番屋敷
 山本将茂
 発行所 大阪市東区越中町一千六百十三番屋敷
 山本将茂
 印刷者 大阪市東区横堀三丁目九番地
 久保田定一
 印刷所 大阪市東区横堀三丁目九番地
 久保田印刷部（奥付）

二 『都々逸集』

竹の舎如山『都々逸集』（大正三年。堀田航盛館）

竹の舎如山は正体不明。
本書は二七九頁の本である。「いの部」から「すの部」
に続き、次の項目がある。

小倉百人一首見立
卅六歌仙見立
六歌仙見立
四季五調
拾式ヶ月の異色
雪月花複調
十二支
七夕七様
恋三十六吟
郭公一夜五拾声
草木拾趣
虫の種々
獣の色々
鳥声五拾趣
天象拾五調
五拾四情見立
滑稽百趣
詩入拾五調
端歌字口入拾五調
文句入七調
字余り拾五趣
琵琶歌入

ここでは、「小倉百人一首見立」の部分を抜き出す。

小倉百人一首見立

天智天皇

○小田のかり庵にふくとまよりも荒いお前の捨て言葉。

持統天皇（九五）

○夏は来にけりみな白たへの浴衣着て出る夕涼み。

柿本人麿

○足曳の山鳥の尾の長々し夜を何うして独で寝附かりよ。

山辺赤人

○田子の浦船漕ぎ出て見なよ富士のたか嶺に雪げしき。

猿丸太夫

○紅葉踏み分け啼く彼鹿も秋と云ふ字が悲しいか。（九六）

中納言家持

○かさゝぎの渡す橋さへ断然絶て来ぬのはあきたかじらすのか。

安部仲麿

○ぬしの天窓をふりさけ見れば三笠の月より猶ほ光る。

喜撰法師

○赤い前だれ見ごとな茶摘みよい宇治山だと人は云ふ。

小野小町

○花の色香のうつるを見ても（九七）案じらるゝよ人

ごころ。

蟬丸

○往くも帰へるも桜をかざし知るも知らぬも酒きげん。

参議篁

○堀をめあてに漕ぎ出し往くと人には告なよこの小舟。

僧正遍昭

○雲の通ひ路風吹きとちよ乙女のすがたが拝み度。

陽成院「(九九)

○みな川の川ではわしや無いけれど恋ぞつもりて淵となる。

河原左大臣

○忍ぶ文字摺夫りや誰故に乱れて涼しい洗ひ髪。

光孝天皇

○君が為めならわしや野に出で、若菜つむともいとやせぬ。

中納言兼輔

○飲めども尽きない此泉川こひし鴨なべ焼きさかな。「
(九九)

源宗于朝臣

○冬の薄衣の寒いに付けて人のくさめも耳につく。

凡河内躬恒

○何れにしやうか格子の先きで霜の白菊目がうつる。

壬生忠峰

○朝の別れが無いものならば何のきはふ明けの月。
伊勢

○浪花渦短き節の間なりと「(一〇〇) 何うして逢はずに過こさりよ。

元良親王

○身をつくしても逢はねばならぬ人にいはれた事もあ
る。

素性法師

○今来むと云ふてわたしをよもやにかけて最早有明鳥
が啼く。

文屋康秀

○秋の草木のしほむを見ても涙こぼすか泣上戸。

中納言行平「(二〇一)

○立別れても稲葉の山の松と聞いては又かへる

在原業平

○神代にもないお前の浮気私や小腹が立田川。

藤原敏行朝臣

○岸による浪小舟にゆられ夢の通路三谷ぼり。

大江千里

○銭は無くなる女郎にやぶられ我が身一つにあきれ顔。「
(二〇二)

菅家

○酒のさかなは先づ取り敢えず秋の紅葉の錦梅。

三条右大臣

○今宵しのむで逢阪山を人に知られてなるものか。

貞信公

○峰の紅葉にあかるい路を小倉山とはたが云ふた。

参議等

○小野の篠原しのぶとすれど」(一〇三) 我をわすれちや口ばしる。

平兼盛

○しのぶ恋路は遂色に出てもものや思ふと人が問ふ。

壬生忠見

○人知れず思ひそめしが最兎や斯と浮名立てば猶止め。

清原元輔

○末の松山波こすとてもかわりやせぬぞい我が心。

春道列樹」(一〇四)

○利上利上にしがらみついて流れもあへない質ばかり。

紀友則

○光りのどけき金くわん天窓風もひかぬに鼻が出る。

坂上是則

○有明の月と見る迄で吉野の里に今朝は白雪降り積る。

右近

○忘らるゝ身は仕方無いがそれぢや誓ひの神よごし」

(一〇五)

文屋朝康

○風に吹るゝ白露よりも人の心はちりやすい。

藤原深養父

○まだ宵と思ふ間もなくモウ明の空雲のいづこに月宿る。

紀貫之

○花の姿はふり捨てたれど何所か昔の香が残る。

藤原興風

○うたひうたひの声高砂に」(一〇六) 枝もさかへる松づくし。

儀同三司母

○忘れまいぞへ行末迄も堅いちかへの入れどころ

右大将道綱母

○独寝の夜の其明くる間はいかに久しい物思ひ。

藤原道信朝臣

○明けりや暮るゝと偕知りながら鐘や鳥がうらめしい。

藤原実方朝臣」(一〇七)

○えはやいぶきの三年もぐささしも名物よくもゆる。

大中臣道信朝臣

○衛士の焚く火と私しの胸は昼は消えても夜はもゆる。

源重之

○酔ふたふまぎれにほうつた茶碗くだけで今更ものおもひ。

惠慶法師

○すけんぞめきの人さへ見え秋はさみしい格子先。」

(一〇八)

曾根好忠

○梶を絶えたる私や捨小舟行方も知らずにこがれ居る。

謙徳公

○色よ酒よの身のいたづらにあはれな姿も心から。

中納言朝忠

○なまじ逢ひ見て猶もの思ひ知らぬ昔にして欲しい。

権中納言敦忠

○夜たかきり店昔は物を」(一〇九) 思はぬ報ひの此よこね。

大納言公任

○夜着やどてらも久敷なれば今に流れが来るだらう。

和泉式部

○とても此の世の思でならば腎虚と食傷がして見度い。

紫式部

○廻り逢て見れば夫とも分らぬ内に主に外して雲がくれ。

相模」(一一〇)

○恋に朽なん名は惜しけれど今更意地でも切れられぬ。

大僧正行尊

○夜着やふとんもあはれと思ひわたし一人で床の番。

権中納言定頼

○宇治の川霧夜は明はなれ瀬々のあじろが見え渡る。

左京太夫道雅

○たつた一言人伝ならで云ふて置き度い事がある。」(一一一)

清少納言

○鳥の空音ははかりもしやうが主の空寝ははかられぬ。

伊勢大輔

○奈良の桜は色香はよいが八重と云ふ字が気に喰はぬ。

小式部内侍

○天の橋立生野の道の遠い旅路をふみのつて。

赤染衛門

○待てど来ぬ夜はかたぶく迄の」(一一二) 月の鳥や明のかね。

大弐三位

○私やお前に気が有馬山今更いなとは云はしやせぬ。

周方内侍

○夢でなりとも逢はしておくれ夢ぢやうき名が立はせぬ。

三条院

○私やすゝきの野に住む兔。恋しなつかし夜半の月。

能因法師」(一一三)

○ツイした事にも言葉の嵐顔に紅葉を散らすのか。

良暹法師

○銭のないときやいつでも同じ私やまい日あきの夕。

大納言経信

○主のこゝろとかど田のいな葉いつしか秋かぜ吹いて居る。

祐子内親王家紀伊

○まくら引き寄せかけしや袖のぬれて嬉しい床の海。」(一一四)

前中納言匡房

○下戸のお酒ととやまのかすみたゝずとやつぱりのむがよい。

源俊頼朝臣

○何のあたまと八つ瀬のあらしはげ光れとていのりや

せぬ。

藤原基俊

○ちぎり扱ても逢ふ逢ふと露のいのちの草のいろ。

法性寺入道前関白太政大臣

○雲井はるかに帆のかげ見えて」(一一五) おきつ白なみ立つかもめ。

崇徳院

○岩にせかるゝ彼たき川のわれても末にはまた一つ。

源兼昌

○くもの絶え間をもれ出る月にさえて聞こゆるかみきぬた。

待賢門院堀河」(一一六)

○まくらはづして島田のかみを乱したあげくは気が重い。

道因法師

○うきにたえぬか此の雪風にはつはな涙でひく車。

皇太后大夫俊成

○竹の柱を苦にするものか山のおくにもしかの鳴く。

西行法師

○南瓜づらしてなみだをこぼし月やはものをもよく出来た。」(一一七)

寂蓮法師

○つゆものこさずみな喰ひつくし秋の夕めしよくすむ。

皇嘉門院別当

○芦のかり寝の一よさなりと逢ふてはなしがして見度い。

式子内親王

○何の玉の緒たえなば絶えぬ逢はで苦勞をするにやまし。

殷富門院大輔

○ぬしに見せばやぬれにぞぬれん」(一一八) 雨の夜明の花のつや。

後京極摂政太政大臣

○きりぎりす啼くや霜夜の淋しい土手をどうして今ごろ帰へさりよか。

二条院讃岐

○沖のいしかやわたしの袖はかわくひまさへ泣なみだ。

鎌倉右大臣

○あまの小舟のちかいをおして須磨や明石のわびずまひ。

参議雅経」(一一九)

○山の秋風夜はしんしんと更けて身にしむとうきぬた。

前大僧正慈恵

○みすてられゝばわしや墨ぞろの袖とかく悟はきめて居る。

権中納言定家

○やくやもしほの身もこがれつゝ。主を松尾のうら座敷。

藤原清輔朝臣

○うしと見し夜も今日びとなつて見れば恋しい事ばかり。(一二〇)

入道前太政大臣

○庭のあらしに降る雪ならでつもるわたしのもの思ひ。

従二位家隆

○ならの小川の夕吹くかぜに夏もすゞしく飛ぶほたる。

後鳥羽院

○味家なき世とあきらめながらたれしもお金はほしいもの。

順徳院

○百敷や古き布子を重衣しても(一二一) 冬の夜風は身にあまる。

後徳大寺左大臣

○ぬしを帰してれんじを見れば小田の有明なほのこる。

俊恵法師

○つれなかりける女郎を買えば一人まくらに夜もすがら。(一二二)

大正三年七月廿五日印刷

大正三年八月一日発行

著者 竹の舎如山

発行者 大阪市西区九条町五百五拾壹番地

堀田金吾

印刷者 大阪市西区阿波座中通二丁目四番地

荒木佐兵衛

発売所 大阪市西区九条町五百五拾壹番地

堀田航盛館本店

大阪振替口座九八八七番

販売所 大阪市西区九条町五丁目千百八拾八番屋敷

堀田航盛館支店(奥付)

三 「百首俚謡」

毛利文質は弁護士。「東京朝日新聞」明治三十八年十二月二十九日の六面によれば、当時(1905年)41歳。よって元治元年(1864)生まれとなる。99歳まで生きたとしても著作権は切れている。

服部鉄石(友吉)著『茨城人物評伝』(明治三十五年)には、次のようにある。

毛利文質君

君は水戸弁護士に於ける最も洒落なる人なり、又弁護士中に在て頗る書を能くし亦読書の力ある人なり、……蓋し山田喜之介君の流亜にして亦弁護士中の変わりものと謂ふべき哉

以下、「法律新聞」第千六十一号(大正五年一月一日)第千六十二号(大正五年一月五日)掲載の「百首俚謡」を掲げる。

百種俚謡

毛利文質君記

天智天皇

秋の実入を田中の小屋で露にビツシヨリ夜の番

持統天皇

天の香久山霞が消えた今年もソロソロ夏らしい

柿本人丸

しだれさゞなみ長尾の夜さをまたも独で寝るのかい

山辺赤人

田子の浦から富士山見れば空に真白く雪化粧

猿丸太夫

紅葉カサカサ深山の奥で秋は淋しや鹿の声

中納言家持

天の河原も夜更けと見えて白くなつたよ橋の霜

安倍仲麿

仰ぐ空には月まんまるとあれが故郷で見た月か

喜撰法師

私シヤ都の辰巳にチャンと人の居にくい宇治に住む

小野小町

咲た桜が長雨に散れた私の姿も花ふゞき

蟬丸

関は名に負ふその逢坂よ知るも知らぬも出這入りに

参議篁

島を目かけて私の船が漕で往んだと告げてくれ

僧正遍昭

空を吹く風雲かきよせて留めておくれよ舞ひ姿

陽成院

筑波山から落ち来る水も声が積つて深い淵

河原左大臣

奥の信夫の摺衣の模様乱れかけしは誰のため

光孝天皇

そなたに遣ろうと春野に出で、若菜摘む日に雪が降る

中納言行平

今は因幡と別れて行くが待つと聞いたたら直ぐ帰る

在原業平朝臣

立田川水、絞りに染めた神代このかたなき見物

藤原敏行朝臣

夜の夢さへ人目を避けて通ふ恋路のしをらしや

伊勢

節間短い難波の蘆も何んで遇はずに過ごさりやう

元良親王

逢へぬ様なら死んだがましよ生きて居たとて甲斐がない

素性法師

嘘をまこと、夜長を待てば人は来ないで月が出た

文屋康秀

吹くや秋風、草木を傷るホんに嵐とよくいふた

大江千里

月に向へば悲しき起る我身計りの秋にして

菅家

いまは紅葉がみ山を包むそれで幣をば手向けない

三条右大臣

小寝とねの付くかつらのそなた人に知らさで逢ひに来
い

貞信公

心あるなら小倉の紅葉散らでお待ちよ御幸まで

中納言兼輔

湧て流るゝ泉のみ川いつ見初めてか恋をする

源宗于朝臣

み山住居は冬こそ淋し人も訪ひ来ず草も枯れ

凡河内躬恒

庭に一面初霜降りてどれが愛した白菊か

壬生忠岑

月があるのにはや夜が明けたホンに夜明けはつらいも
の

坂上是則

明けて間もなく吉野を見れば月によう似た雪明かり

春道列樹

山の小川に柵つくり風が紅葉をかけてゆく

紀友則

春はゆつくり日足も永い何んで世話しく花が散る

藤原興風

古い松さへ馴染ぢやないよ誰を知るべにしてやろう

紀貫之

人の心は何とも知れぬ変らないのは梅の花

清原深養父

夏は短夜、宵から明ける月は宿りを何処にした

文屋朝康

秋の草野へおく白露を風がのべつに玉と吹く

右近

神に願掛け誓ひし命、背く人こそいたましい

参議等

忍び堪へて隠して居ても思余つてさわぐ胸

平兼盛

かくす我恋知れたと見えて苦勞あるかと人がきく

壬生忠見

恋といふこと人にも知れていつか浮名がぱつと立つ

清原元輔

涙ながらに行末かけて契る約束何としよう

権中納言敦忠

逢ふて思ひが一入募るいつそ逢はぬがまだましだ

中納言朝忠

唯の一度も逢はなキヤいつそ人も我身も恨むまい

謙徳公

可愛想だといふべき人が変る心に無駄死か

曾根好忠

由良の湊を漕ぎゆく舟が楫をなくした恋の道

恵慶法師

葎沢山鎖した宿に人は来ないが秋は来た

源重之

風の強さに岩うつ波とくたく心も先や知らぬ

大中臣能宣

胸の炎も夜こそ燃ゆる昼は淋しく物思ひ

藤原義孝

あなたの為なら惜まぬ命、共に此世に暮したい

藤原実方朝臣

燃ゆる思ひも言はねばさうと先きは知るまいこの胸を

藤原道信朝臣

明けて暮れるを知らぬぢやないが矢つ張り明け方恨めしい

右大将道綱母

思ひ焦れて明け待つ夜さはどんなに長いと思し召す

儀同三司母

長い契りの変らぬ内にけふを限りにしたがよい

大納言公任

滝は涸れても轟く音を今に世間で聞いて居る

和泉式部

死んでゆく世の後生のためにも一度逢たいそなさんに

紫式部

久振にて出逢つた友は見たか見ぬかに雲の月

大式三位

何んで忘れよか忘れよか人を人は忘れよと忘れない

赤染衛門

来ぬと知れたらぐつぐつ夜さを月の入るまで待ちませ
まい

小式部内侍

丹波丹後の道程遠く今に見えない母の文

伊勢大輔

同じ桜もきのふの八重が匂ひまさるや九重に

清少納言

深い夜中をいつはる鳥も許しやせぬぞいこの閨は

左京大夫道雅

せめての望は人手を借らず面と向つて切れる丈

権中納言定頼

朝は嬉しや川霧消えて瀬々の網代木見えて来る

相模

恨む涙に袂をぬらし干すに干されず名も朽ちた

大僧正行尊

み山住居もそなたが便り同じ心か山桜

周防内侍

春の短い仮寝の枕浮名立てゝも甲斐がない

三条院

死ぬにや死なれずこの世にあらば今宵の月こそ又偲べ

能因法師

嵐吹く三室の紅葉それが立田の川錦

良暹法師

心淋しく軒端を出れば何処も彼処も秋の暮

大納言維信

風は夕暮、門田を過ぎて蘆の丸屋に吹いてゆく

祐子内親王紀伊

音に聞えた高しの浪と契りや遂には袖ぬらす

権中納言匡房

向ふ高嶺に桜が咲いた霞立たすな前の山

源俊頼朝臣

苦勞すりやこそ泊瀬に祈れどうして烈しく吹くかいな

藤原基俊

交はす約束命に代へて待ちし甲斐なくまた過ぎた

法性寺入道前関白太政大臣

波の真中に漕ぎ出て見れば海か雲かゞ知れ悪い

崇徳院

岩に当つて分れた滝も末は一つの川となる

源兼昌

たゞの一夜も侘しい千鳥須磨の国守幾夜きく

左京太夫頭輔

風のまにまに千切つた雲を清く漏れ出る秋の月

待賢門院堀河

長い黒髪変りはせぬか乱れ心になでゝ見る

後徳大寺左大臣

声を使りに残りの月を見れど跡なきほとゝぎす

道因法師

千々に侘びても命はあるが堪へかねたる目の涙

皇太后太夫俊成

暮らす世間に遁げ場がなくて山に這入れば鹿が鳴く

藤原清輔朝臣

つらい昔が今では恋し後ニヤ今頃偲ぶだろ

俊恵法師

夜も寝られず夜明けを待てば寝屋の隙間も癩の種

西行法師

心配せよとお月は照らぬ涙流すはこちのせい

寂蓮法師

そゞ村雨槇葉に宿り秋の夕日に霧が立つ

皇嘉門院別当

旅のかりねのたゞ一晚で命限りに苦勞する

式子内親王

包む締りの緩まぬ内にいつそ死だがましである

殷富門院大輔

蟹の袂は潮でぬれる私の袂は血のなみだ

後京極摂政太政大臣

寒い霜夜のこうろぎ聞いて床に独で丸寝する

二条院讃岐

私の袂は塩干ぬ磯よ人は知らねど乾キヤせぬ

鎌倉右大臣

命長らい海士引く小舟幾度なりとも来て見たい

参議雅経

秋の山風吉野に寒く砧うつ音に夜が更けた

前大僧正慈円

国家安穩禱るもかしこそれも比叡に住めばこそ

入道前太政大臣

風に吹かれて散りゆくものは雪ヂヤなくつて我この身

権中納言定家

つれないお方をまつほのつらさ藻塩焼く日の夕風に
従二位家隆

檜の小川に夕風そよぐ襖ギヤ夏来た知らせかい
後鳥羽院

人も惜いが又恨めしい兎角この世はまゝならぬ

順徳院

お宮の軒さへ忍ぶが生へたホンに昔が懐い

四 『都々逸大会』

石田紅情（石田紅波）編『都々逸大会』（昭和三年）は、
次の項目から成っている。

都々逸の特質

都々逸の唄ひ方

都々逸の三味線

都々逸調の小唄集

諸名士の名吟集

時代と都々逸

都々逸大寄せ

五字冠と文句入都々逸集

恋の都々逸百人一首

都々逸十二ヶ月

四季読込都々逸集

都々逸大寄せ（雑題読込）

即席都々逸作法

身分職業読込都々逸集

夫婦喧嘩都々逸集

極楽上戸都々逸集

東京名勝読込都々逸集

全国名所見立都々逸集

明治政治家読込都々逸集

明治珍物読込都々逸集

石田紅情（石田紅波）は、『都々逸の研究』（大正十年）
著者・石田龍蔵のことと思われる。『都々逸の研究』の
「新作五字冠都々逸」と『都々逸大会』の「五字冠と
文句入都々逸集」とでは十三首が同じ、又はほとんど
同じであることから、両書の著者・編者は「石田龍蔵」
であると判断してよい。石田龍蔵は生没年不明。
以下、「恋の都々逸百人一首」を抜き出す。

恋の都々逸百人一首

○小田の刈庵に茸くとまよりも、荒いお前の捨言葉。

○夏は来にけり皆白妙の、ゆかた着て出る茶屋女。

○足曳の山鳥の尾の長々し、夜を何うして独で寝付り
やう。

○田子の浦舟漕出て見なよ、富士の高根に雪げしき。

○紅葉ふみ分けアノ鳴く鹿も、秋と云ふ字が悲しいか。
○鵜の渡す橋さへふつつり絶へて、来ぬのは飽きたかぢらすのか

○主の天窓をふりさけ見れば、三笠の月より尚ほ光る。
○赤い前だれ美事な茶摘、よひ宇治山だと人は言ふ。」

(八七)

○花の色香の移るを見ても、案じらるゝは人ごゝろ。
○往くも返るも桜をかざし、知るも知らぬも酒機げん。
○堀を目当てに漕出し往くと、人には告げなよ此小舟。
○雲の通路風吹きとぢよ、乙女の姿がおがみたい。
○みな川の川では妾や無いけれど、恋ぞ積りてふちとなる。

○忍ぶ文字摺夫や誰ゆるゑに、乱れて涼しい洗ひ髪。
○君が為めなら妾や野に出でゝ、若菜摘むとも厭やせぬ。

○立別れても稲葉の山の、待つと聞いては又かへる。
○神代も聞かないお前の浮気、妾しや小腹が龍田がわ。」

(八八)

○岸に寄る波小舟にゆれて、夢の通ひじ三谷ぼり。
○浪花瀉短き芦の節の間なりと、何うして逢はずに過されやう。
○身をつくしても逢はねばならぬ、人に言はれた事がある。

○今来と云つて妾をよもやにかけて、最はや有明け鳥がなく。

○秋の草木の萎むを見ても、涙こぼすか泣き上戸。
○銭は無くなる女郎にや振られ、我が身一ツに呆れ顔。
○酒の肴は先づ取りあへず、秋の紅葉のにしき梅。
○今宵忍んで逢坂山を、人に知られてなるものか。
○峯の紅葉に明るいみちを、小倉山とは誰が云ふた。」

(八九)

○飲めどつきない此泉川、こひし鴨なべ焼かな。
○冬の薄衣の寒むいにつけて、人のくさめも耳につく。
○何れにしやうか格子の先きで、霜の白菊目がうつる。
○朝の別れが無いものならば、何んの嫌はう暁の月。
○有明の月と見る迄で吉野の里に、今朝は白雪降り積る。

○利上利上にしがらみかけて、流れも敢へない質ばかり。

○光のどけき金柑あたま、風もひかぬに鼻が出る。

○唄へ唄への声高砂に、枝も栄える松づくし。

○花の姿はふり捨てたれど、何所か昔の香のこる。」

(九〇)

○まだ宵と思ふ間も無くモウ明の空、雲のいづこに月宿る。

○風に吹かるゝ白露よりも、人の心は散りやすい。

○忘すらるゝ身は仕方無いが、夫れじや誓ひの神汚し。

○小のゝ篠原忍ぶとすれど、我を忘れちや口ばしる。
○忍ぶ恋じもツイ色に出で、物を思ふと人が問ふれ

○人知れず思ひ初めしがモウとや斯と、浮名が立つては尚止ぬ。

○末の松山波こすとても変りやせぬぞへ我がこゝろ。

○夜たか切り店昔は物を、思はぬむくい此のよこね。

○なまじ相見て尚物思ひ、知らぬ昔にしてほしい。」(九一)

○色よ酒よの身のいたづらに、哀れな姿も心から。

○かぢの絶えたる妾や捨小舟、行方も知らずに焦れ居る。

○素見ぞめきの人さへ見えぬ、秋は淋しい格子さき。

○酔ふた紛れに投たる茶碗、砕けて今更物思ひ。

○衛士の焚く火と妾の胸は、昼は消えても夜は燃ゆる。

○つゆの命を長くもがなと、思ふもお前があればこそ。

○ゑやはいぶきの三年艾、さしも名物よくもゆる。

○明けりや暮るゝとさて知り乍ら、鐘やからすが恨めしい。

○一人寝る夜の其の明る間は、いかに久しい物思ひ。」

(九二)

○忘れまいぞへ行末までも、堅い誓ひの入れぼくろ。

○夜着もどてらも久しくなれば、今ぞ流れが来るだらう。

○迎も此の世の思ひ出なれば、○○と食傷がして見度い。

○巡り逢ひ見れば夫とも分らぬ内に、今更いなとも云はしやせぬ

○待てど来ぬ夜は傾くまでの、月のからすや明の鐘。

○天の橋立いくのゝ道の、遠い旅路を文のつて。

○奈良の桜は色香もよいが、八重と云ふ字が気に入らぬ。

○鳥の空音は計りもせうが、主の空寝は計られぬ。

○唯た一言人伝ならで、言ふてをき度い事がある。」(九三)

○宇治の川霧夜は明けはなれ、瀬々の網代が見え渡る。

○夜着やふとも哀れと思へ、妾や一人で床のぼん。

○恋に朽なん名は惜しけれど、今更意地でも切れられぬ。

○夢でなりとも逢しておくれ、夢じや浮名は立ちやせぬ。

○妾やすゝきの野に住む兔、恋しなつかし夜半の月。

○ツイした事にも言葉の嵐、顔に紅葉をちらすのか。

○銭の無い時や何時でも同じ、妾や毎日秋の夕。

○主の心と門田の稲葉、いつしか秋風吹いて居る。

○枕引き寄せかけしや袖の、濡れて嬉しい床の海。」(九四)

○下戸のお酒と外山のかすみ、たゝずとヤツパリ吞むがよい。

○何の天窓と初瀬の嵐、はげて光れと祈りやせぬ。

○ちぎり捨てゝも尚ほ青々と、露の命のくさの色。

○雲井はるかに帆の影見えて、沖津白波たつかもめ。

○岩にせかるゝアノ滝川の、割れても末には又一つ。

○いゝよいゝよに啼く声聞けば、千鳥と思へば気が悪
るい。
○竹の柱を苦にするものか、山の奥にも鹿は住む。
○つれなかりける女郎を買へば、独り枕に夜もすがら。
○南瓜面して涙をこぼし、月やは物をもよく出来た。」
(九五)
○汁も残さず皆食ひつくし、秋の夕めし食すゝむ。
○雲の絶へ間をもれ出る月に、冴えて聞こゆる紙ぎぬ
た。
○枕はづして島田の髪を、乱したあげくは気が重い。
○主を返して連子を見れば小田の有明け尚残る。
○うきに絶へぬか此の雪風に、初花涙でひく車。
○芦のかり寝の一夜なりと、逢ふて話がして見度い。
○何の玉緒絶へねばたへね、逢はで苦勞をするにやま
し。
○主に見せばや濡れにぞ濡し、雨の夜明の花のつや。
○きりぎりす啼くや霜夜の淋い土手を、何して今頃帰
されやう。」(九六)
○沖の石かや妾の袖は、干くひまさへ泣く涙。
○あまの小舟のろかひを押して、須磨や明石の詫び住
居。
○山の秋風夜はしんしんと、更けて身にしむ遠きぬた。
○見捨られゝば妾や墨染の、袖とかくごは決めて居る。
○焚くしほの身も焦れつゝ、主を松尾の裏ざしき。
○うしと見し夜は今日日となつて、見れば恋しい事ば

かり。

○庭の嵐に降る雪ならで、つもる妾の物思ひ。

○奈良の小川の夕吹く風に、夏も涼しくとぶほたる。

○味気なき世と諦めながら、誰れしもお金は欲しい物。」

(九七)

○百敷や古き布子を重着しても、冬の夜風は身にあま
る。」(九八)

昭和三年十月一日印刷
昭和三年十月十日発行

〔全国〕都々逸大会

編輯者 石田紅波

発行者 東京市浅草区南元町二番地
天野重助

印刷者 東京市外三河島町九三三
天野喜子三郎

印刷所 東京市外三河島町九三三
三盟舎印刷所

発行所 東京市浅草区南元町二番地
三盟舎書店

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)

振替東京三三四七九番」(奥付)